

teniteoクリニック

子どもの症状別に、気をつけたいポイントやお家で出来る正しい対処法を先生に教えて頂きます。

子どものワクチン接種

数多くのワクチンを計画的に受ける必要があります。まずは、どんなワクチン接種が必要なのか確認してみましょう。

予防接種を受ける前に

予防接種が受けられない場合があります。詳しくは接種先の病院で相談しましょう。



こんなケースは注意！

- 接種場所で体温が37.5度以上の場合
- ワクチンの成分にアレルギーがある
- 接種により発疹、じんましん、アレルギー症状がみられる
- 病気で薬を飲む必要がある場合など

接種するとよいワクチン11種

1歳まで

必須

- 肺炎球菌ワクチン (2ヶ月～1歳)
- ヒブワクチン (2ヶ月～1歳)
- 4種混合ワクチン (3ヶ月～1歳)
- BCG (4ヶ月～1歳)
- MRワクチン (1歳・1回目)
- 水痘ワクチン (1歳～2歳)

任意

- ロタウイルスワクチン (2ヶ月～6ヶ月)
- B型肝炎ワクチン (2ヶ月～1歳)
- おたふくかぜワクチン (1歳・1回目)

2歳以上

必須

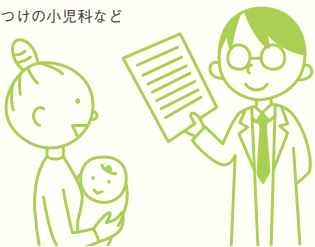
- 日本脳炎ワクチン (3歳～4歳、9歳)
- MRワクチン (6歳・2回目)

任意

- おたふくかぜワクチン (3～6歳・2回目)

予防接種を忘れないために

予防接種スケジュールや個々のワクチンについてわからないことがあれば、保健所やかかりつけの小児科などでご相談下さい。



今月のテーマ

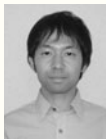
予防接種のすすめ

<対象年齢/0～6歳>

予防接種って本当に効果があるの？
計画的なスケジュールで病気を予防しよう！

本日の予防接種は、この10年間で大きく変わりました。肺炎球菌ワクチン、ヒブワクチン、ロタウイルスワクチン、四種混合ワクチン…と新しいものもたくさん増えました。これらのワクチンが増えて、何か変化はあったでしょうか？今回は、医療者の視点から気付いたことをお話しします。まず、小児科を受診する患者さん、特に重い感染の子が明らかに減りました。アメリカでは、肺炎球菌ワクチンとヒブワクチン導入後に重い感染症の子どもが95%以上減少したという報告があり、日本でも2012年以降、細菌性髄膜炎をほとんど見なくなっています。

まず。肺炎球菌を原因とする肺炎や急性中耳炎も減っています。またロタウイルスワクチン導入後は、嘔吐を繰り返し点滴が必要な赤ちゃんが少なくなりました。その結果、感染で入院する子が減り、小児科病棟の空きベッドが増えた病院も多いと感じています。現在、任意接種を含めて10種類以上のワクチンがあります。たくさんさんのワクチンを受けるのは大変ですが、予防接種の恩恵はとても大きく、どのワクチンも受ける価値があります。病気を予防することで頻回の受診や入院の付き添いから解放されます。是非とも積極的なワクチン接種をお勧めします。



●監修
西門優一先生

平成26年度より小児センター勤務。専門は小児内分泌ですが、小児一般診療も行っています。病気を治療するだけでなく、子どもたちの成長や発達を見守ることを大切に診療しています。

あいち小児保健医療総合センター

愛知県大府市森岡町7-426

☎0562-43-0500 ☺日・月

<診察時間>9:00～12:00、13:00～16:00(紹介予約制)

<http://www.achmc.pref.aichi.jp/>

